

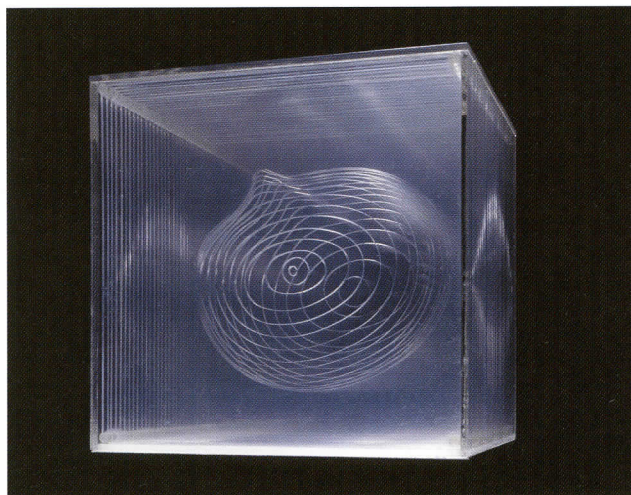
誌上 ギャラリートーク

## Gallery Talk

01

### トリック・アートの世界展 視覚の迷宮へようこそ!

会期 2011年4月15日(金) ▶▶ 5月29日(日)



伊藤隆康《負の楕円》1967年 高松市美術館蔵

「トリック・アート」と聞いて真っ先に思い浮かぶものとは何でしょうか? やっぱ「だまし絵」でしょうか? ちょっと見ただけでは普通の絵なのに、すこし見方を変えたり、視点を変えたりすると別の絵に見えたり、見えなかったものが見えたり…。

私たちが五感の中でもっとも頼っているのは視覚です。しかしその視覚も個人の経験や感情に影響を受けて「見間違う」事がよくあります。辞書で「トリック」を検索すると「人の目を欺くためのはかりごと」とありますが、そんな私たちの視覚の特性を巧みに利用して制作された美術が「トリック・アート」なのです。

ここでご紹介する伊藤隆康の《負の楕円》もそんなトリックを利用した作品のひとつです。写真では分かりにくいかもしれませんが、アクリルの箱の中で楕円形の物体が青白い光に照らされて浮んでいます。とてもきれいなオブジェですが、この楕円形は一体どのようにして浮かんでいるのでしょうか? 糸でつっている? ホログラム? ヘリウム風船? ぜひ展示室で実物を見て、謎解きをお楽しみください。

[石床亜希]

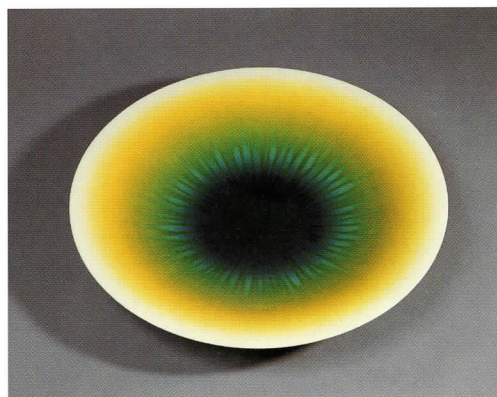
02

### 追悼 人間国宝 三代徳田八十吉展 ～煌めく色彩の世界～

会期 2011年6月4日(土) ▶▶ 7月10日(日)

九谷焼の窯元に生まれた、三代徳田八十吉(とくだ やそきち)。彼は祖父である初代から秘伝とされる九谷焼の色釉の調合を伝授されたことにより、家業の陶芸に向き合う決心をつけ、伝統的な古九谷の技法を基にしながら、現代の九谷焼をもとめて研鑽を続けました。新しい様式を生み出すことこそ自分の仕事である、と徳田は考えたのです。

伝統的な九谷焼の色である「黄・緑・紺・紫・赤」の中から、「赤」をのぞく色彩を組み合わせて創り出した奇跡のようなグラデーションは、200色を超えるそうです。徳田は釉薬を高温焼成することから神秘的な透明感が生み出されることを発見し、ついに前人未踏の「耀彩(ようさい)」とよばれる彩釉磁器を創造するに至りました。そしてその技術が認められ、



三代徳田八十吉《耀彩鉢「創生」》1991年 東京国立近代美術館蔵

1997年重要無形文化財保持者すなわち「人間国宝」に認定されました。

本展は、三代徳田八十吉没後初めての大規模な回顧展です。代表作を中心に、修行時代に古九谷を写した作品や、現代美術のフォンタナやモンドリアンから影響を受けた作品、「耀彩」完成以前の過渡的な作品などによって創作の軌跡をたどります。また、江戸時代の古九谷・吉田屋(再興九谷)の名品や、初代と二代の代表作もあわせて展示します。

[石原ミエ子]



時	記事	活動内容
10/1		しびのーと 22号発行
9/18~10/24	<b>A</b>	「高松コンテンポラリー・アートアニュアル vol.01 もうひとつのカーニバル」展ギャラリートーク (開催回数のべ18回、参加者数のべ194名)
9/18		「高松コンテンポラリー…」展アーティスト・トーク (講師: 出品作家・青木綾子氏、猪瀬直哉氏) 参加
9/18		「高松コンテンポラリー…」展トーク&パフォーマンス (講師: 出品作家・石田尚志氏) 参加
9/18		「高松コンテンポラリー…」展トーク (講師: ゲスト浅井俊裕氏、林洋子氏) 参加
10/3	<b>B</b>	「高松コンテンポラリー…」展ワークショップ「水の空間をつくってみよう！」(講師: 出品作家・カミイケタカヤ氏) アシスタント
10/16		「高松コンテンポラリー…」展アーティスト・トーク&映像上映 (講師: 出品作家・青木綾子氏、ゲスト・伊藤存氏) 参加
10/16		「高松コンテンポラリー…」展ダンスパフォーマンス (講師: 出品作家・山下残氏) 参加
10/16		「高松コンテンポラリー…」展アーティスト・トーク (講師: 出品作家・山下残氏、カミイケタカヤ氏) 参加
10/16		「高松コンテンポラリー…」展トーク (講師: ゲスト天野一夫氏) 参加
11/24	<b>C</b>	「高松コンテンポラリー…」展ワークショップ「手のひらの山脈をつくらう」(講師: 出品作家・山下香里氏) アシスタント
11/2~12/5	<b>D</b>	「植田正治写真展 写真とボク」ギャラリートーク (会期中日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ14回、参加者数のべ193名)
11/6		「植田正治写真展 写真とボク」記念対談 (講師: ファッションデザイナー・菊池武夫氏、写真家・瀬尾博司氏) 参加
11/7	<b>E</b>	「植田正治写真展 写真とボク」ワークショップ「ミニ砂丘大撮影会」(講師: 写真家・瀬尾博司氏、アート・ディレクター・松崎理氏) アシスタント
11/21	<b>F</b>	「植田正治写真展 写真とボク」子どものアトリエ「影絵写真に挑戦!」「オーバー・リアクション写真に挑戦!」(講師: 写真家・GABOMI氏) アシスタント
12/4		豊島美術館ほか訪問
1/23		丸亀市猪熊弦一郎現代美術館「杉本博司 アートの起源 科学」鑑賞
2/5	<b>G</b>	塩江美術館特別展「へんないきもの」鑑賞
2/20		「世界の絵本作家展III」ワークショップ「袋でお面をつくらう」&ミニ絵本ライブ (講師: 長谷川義史氏) アシスタント

※ギャラリートークは会期中の日曜・祝日、各午前・午後で開催



山下香里さんの展示コーナーにて。独自の空間構成により展示室が普段とは全く異なる雰囲気。

今年のアニヴァーサリー展は、自然を背景に展開される瀬戸内国際芸術祭に対して閉じられた箱の中で開かれるもう一つの祭りという設定でしたが、まさに秘密の隠れ家に侵入するような、ドキドキするカーニバルでした。個々の作品だけでなく、5人の作家が思い思いに独自の空間を創り出した展示それぞれが一つの作品とも言える展覧会で、トークでは作品の解説というより、それぞれの空間に対する各作家の思い入れ(テーマ)を紹介しましたが、来館者自身がそれぞれの空間の色や音や温度を感じ取れるよう、トーク中にも黙って向き合う時間を長めに取るようにしました。一つ白状することは、カミイケタカヤさんの海底に侵入した時タイムング良く作家ご本人がいらしたので、直接トークをお願いしちゃったこと。これってあり、ですよねー。【池田幸子】

**A** 「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.01 もうひとつのカーニバル」展  
ギャラリートーク

手際よく石膏を溶く山下香里さんのさややかな指先に見とれながら始まったワークショップでした。手のひらに水をすくう形に丸め、その中に石膏を流し固めてひっくり返すとできる山脈。本当にエベレストやアルプス山脈

**C** ワークショップ「手のひらの山脈をつくらう」アシスタント

「三好ひさ子」

写真かあ…と正直私は思いました。今まで写真展など、熱心に観たことがなかったのです。という訳で、植田正治—もちろん全く知らないまま、ギャラリートークのための勉強に取り組み、資料を読み込んでいくうちに徐々に姿を現す私なりの植田像。「演出写真」と言われるモノクロの単純な世界に、じんわりと血の通うのを感じまし

**D** 「植田正治写真展 写真とボク」ギャラリートーク



ワークショップ制作風景

のような雪山に見えるから不思議。次にトライしたのは長く続く連峰連山。全員で向き合い手を交互にならべ石膏を流し入れます。息を合わせないと石膏がこぼれるので協力し合いながら固まるのを待ちます。何かの儀式みたいで神聖な時間が流れ、最後は皆で無事完成できた喜びを分かち合えたと思います。【國本康代】



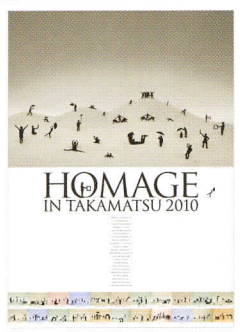
ワークショップ作品

**B** ワークショップ「水の空間をつくってみよう」アシスタント

ワークショップの内容は、ビンの中に「水の空間をつくる」というもの。自分の好きなものをボンンドでくっつけ、絵の具やマジックで色を付けてできあがったら水を入れる—スノーボールをイメージしたのは私だけではないはず。ところが水を入れるとボンンドが溶け出し、もの達が浮いてしまう、絵の具はゆっくりとビンから剥がれて漂っている。これは不測の事態ではないのだからか? 戸惑う参加者たちに対してカミイケさんは別段驚くふうでもなく、ピンを眺めている。何が起きているか考えてみて、という顔をしている。私は曖昧に笑っしかなかった。



ワークショップ「ミニ砂丘撮影会」参加者作品を掲載した  
ポスター、デザイン：松崎理



### 植田正治写真展 「写真とボク」 関連企画について



2010年11月2日～12月5日、写真家・植田正治の展覧会が開催された。植田は鳥取砂丘など山陰の風景に人々をオブジェのように配した演出写真を撮り続けた人物で、研ぎ澄まされた空間意識とあつけらかんとしたユーモアが不思議に同居するその独自の写真は「植田調」と称され世界中で愛されている。代表作200点からなる展覧会も見ごたえ十分であったが、関連企画も充実したものとだったので簡単に振り返りたい。

まずは11月6日のファクションデザイナー・菊池武夫氏と写真家・瀬尾博司氏による対談。植田と菊池氏のコラボレーション「砂丘モード」誕生の秘密、植田正治のオシャレで好奇心旺盛な人物像、唯一の弟子を務めた瀬尾氏だからこそ知る撮影秘話など、じつに楽しくも貴重な機会となった。



菊池武夫氏（左）と瀬尾博司氏（右）

翌日には、瀬尾氏と植田の撮影に協力した松崎理氏を講師に迎え、「ミニ砂丘」を撮影するワークショップを開催。植田は晩年箱庭のようなミニ砂丘に写真から切り取ったミニチュア人物やを配し撮影した「GITANES」というシリーズを展開しており、それを参加者と共に再現した。まさなら大地に創造主のごとく人物を配し世界を作る植田の「写真する」喜びを実感できる機会となった。

11月21日に開催した子どものアトリエについては本誌報告を参照されたい。12月5日には写真家・高橋章氏を講師に、植田も修行時代に試みたフォトグラムを制作。暗室で印画紙に物を置いて像を焼き付ける非日常性と、仕上がった作品の美しさに皆さん魅了されていた。

11月3日（水・祝）のエントランス・ミニコンサートでは、いつも音楽イベントでお世話になっている音楽家の大山晃氏自らが植田作品がもつノスタルジックな雰囲気に関連して「高校三年生」などの昭和の歌を高らかに熱唱してください。



植田正治へのオマージュ・UEDA とボク」プロジェクト作品。モデル＝西村記人（美術家） 撮影＝GABOMI

最後に、タウン誌、近隣の商店街のギャラリーとのコラボ企画「植田正治へのオマージュ・UEDA とボク」を紹介したい。これは私自身が当館の前の巡回先である新潟市新津美術館において、同館の荒井直美学芸員が新潟の『美少女図鑑』とタイアップし現代風の植田

調写真を同誌面や美術館ギャラリーで紹介していたのを見て、それに触発されて始動した企画であった。若い人に植田を知ってもらえるきっかけになると考えたのである。ご協力いただいたタウン誌「香川 Komachi」は同誌12月号にて寛大にも作品掲載のために誌面4ページを提供してください。同じくご協力いただいた丸亀町商店街が運営するギャラリー「sottoprodotto（ソットプロドット）」では植田展会期にあわせて写真の展示をしてください。撮影を手がけたのは香川で活躍する写真家GABOMI（ガボミ）氏。同氏は植田が故郷の山陰を愛したことに着目し、植田のスタイルを援用しながらも香川の風土に根ざした人と風景を撮影することをコンセプトに、精力的にロケハンを行い、愛すべき作品の数々を生み出してください。

今回は展覧会から派生したいくつかの関連企画を、いずれも充実した内容で実施することができたと思う。それは第一にお世話になった方々のおかげであるが、他方で、植田芸術が確固とした独自の世界を構築したものであるにもかかわらず、周囲との交歓を拒まないオープンな性質を有していることによる所が大きいのではないかと。いま植田正治展を振り返り、ふとそう思う。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]

まず、参加者全員に自由にポーズをとらせて写真を撮ります。（この時、帽子や傘などの小物を使うと植田正治ワールドにより近づきます。）次に、プリントした写真に黒い画用紙を下に重ねて、カッターで人型を切り抜きます。この黒い人型を砂丘に見たてた砂の上にくっつかせてみます。小さなものは奥へ、大きなものは手前に配置すると遠近感のある砂丘シ

### E ワークショップ「ミニ砂丘大撮影」アシスタント

「坂口弘子」



た。好きなものしか撮らなかつた植田の写真家人生。自分のスタイルを曲げざるをえなかつた写真家もいたであろう時代にひたすら「写真する幸せ」を追求できた一生は、かなり恵まれていたのではなかつたか、と、美しい奥様の写真を観ながらしみじみ思う展覧会でした。

香川を舞台上に活躍する写真家GABOMIさんのワークショップは「植田正治写真展」に

### F 子どものアトリエ「影絵写真に挑戦！」アシスタント

「國本康代」



最後は各自の砂と人型を集めて大「ミニ砂丘」の撮影。

オラマの完成です。でもここからが本番！植田正治の助手を務めた写真家瀬尾浩司氏による構図指導と撮影



影絵による千手観音の図

困んで、演出を凝らした写真作り。最初は室内で自分たちが影絵のモデルとなり、色々なものに変身しました。いつもは区切られた展示室として見慣れた部屋が、何も無いガランドウにまぜ変身していてビックリ、最初はモジモジしていた子どもたちがGABOMIさんのマジックで巨大サポテンやクリスマスツリー、天井まで

### G 「へんないきもの」展鑑賞

「池田幸子」

へんないきもの展？とっても楽しいんだって、はまるよ！！そんな声に導かれ初めて足を踏み入れた塩江美術館、そこはまさにワンダーランドでした。4人の女性作家たち（赤松きよ、木村まさよ、千葉尚美、山下真守美）による作品は、それぞれがまさに独創的で命が宿っているかのよう、音色を奏でたり、上から覗かれてみたり、じつと見つめてみたり、自然光の暖かな日差しと木の温もりのある美術館の中で語りかけてくるような、いきいきとしたへんないきもの達に子供達だけでなく大人達もその不思議な世界に引き込まれていったのでした。

「木村真由美」

覆う巨人などに変身してパチリ！…午後は、いつもなら走るな騒ぐなと言われている美術館内のスロープやホール、屋上まで出て、飛んだり寝ころがったりゾンビのごとく生首をさらしたり！大人はヒヤヒヤする少々危険な場所でも子どもたちはこんなに活き活きするのだと、どんだん子どもの元気を引き出すGABOMIさんの手腕にも感心しました。





# 瀬戸内国際芸術祭 2010 訪問記

## ART SETOUCHI 2010

### 直島

既に何回も訪れている直島ですが、芸術祭では一番人気であって、朝一番の船に乗り込むつもりが既に席が無く、10時前に何とか島に着いたら地中美術館は3時間待ち、南寺は「もう今日の分全て券が出ました」と言われ混雑ぶりにびっくり…芸術祭開催直前の6月にオープンした安藤忠雄設計の李禹煥美術館は外からはコンクリート一枚にしか見えないまるで忍者のように姿を隠した美術館、迷路のような通路を通るといくつかのスペースに分かれて「もの派」李禹煥らしい作品が次々姿を現します。石の影に街や人並み、時の流れが映し出される映像は不思議な感覚で思わず見入ってしまいました。

[池田幸子]

### 犬島

芸術祭の開幕直前、10月17日に犬島に行きました。犬島訪問は昨年のciviの研修旅行に続き2回目。船の出港3時間前に高松港に着いたのですが、開幕直前のためか港は多くの人であふれていてびっくり！さらに犬島行きに必要な整理券はすでに配布終了と聞かされ、さらにびっくり&がっかり！！でも親切な係りの方から直島でも整理券の配布があると聞き、その後直島で運良く整理券をゲットし、無事犬島へ向かいました。島に着くと、そこは一年前はとらってかわってすごい賑わい。肝心の作品はというと、昨年も見た精錬所、そして新たに設置された家プロジェクト、いずれも島の風景に溶け込んでいて、「作品を鑑賞する」というよりは、「島を散策する」という感覚で、存分に楽しむことができました。[石床亜希]

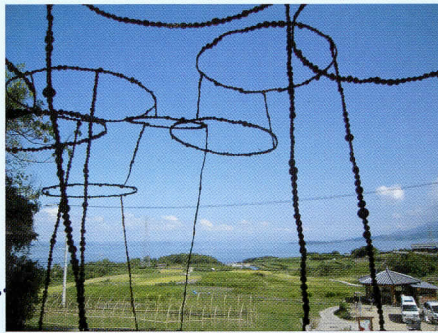


その日は小豆島ではなく、大島の予定でした。大島行きの便が取れず、急ぎよ向かった小豆島一ほとんど何の予備知識もなくドヤドヤと船に乗り込み、ちょっとしたハプニングにわくわくしながら、久しぶりの小豆島に下り立ちました。10月の澄んだ青空の下、観光では訪れることのない田んぼのあぜ道や雑木林の小道をアート作品目指しててくてと歩くのは、本当に気持ちの良い体験でした。特に見事に組み立てられた竹の家では、巨大なドーム天井を見上げながら寝転がった時の、なんと爽快なこと！それともうひとつ、稲を刈り取った後の、はるかに見渡す風景の中にデンと立っていた黄金色のワラのマンモス！私とその凛々しい姿を見た数日後、彼(彼女?)は、強風のため、ついに力尽きて倒れてしまいましたが…。[坂口弘子]

### 小豆島

### 女木島

高松港が一番近い島ですが、ほとんど行ったことがない島です。港では、木村崇人さんのたくさんのカモメが出迎えてくれました。まず面白いなと思った作品は、《不在の存在》です。白い沙の庭に突然足跡だけが現れ歩くのにはびっくり！！茶室のトリックにも驚き感心しました。福武ハウスには、我らが森村泰昌さんの、電気服を着た映像作品がありました。ピカピカ光る電球と森村さんの無表情が印象的でした。海岸近くにあったピアノの上に4つの帆がある作品も夢のある作品でしたな。[植松紀子]



### 男木島

山の斜面を覆うように作られた集落に点在するアートを細くて急な石段をのぼり、案内板を手がかりに一つ一つ見つけていきました。



石畳と石塀の路地に配管されたパイプから聞こえるハモニカの少しポップな音に耳を傾けつつ、島民の必需品オンパ(乳母車)をアートにしたり、窓から望む瀬戸内の海と陶磁器で作られた繊細な波が戯れたり、島の歴史や生活・景色と一体化したアートを楽しむことができました。また、島の頂上にある豊玉姫神社の島こころ椅子でのら猫と一緒にひなたぼっこをしつつ眺めたゆったりとした景色、残念ながら実際見ることができなかった大岩オスカル作品に思いを馳せながら過ごしたのんびりとしたひと時でした。[木村真由美]

### 豊島

まだ秋の気配の残る12月の初めに、civiのメンバーで豊島に行きました。まずは、森万里子の「トムナフーリ」です。竹やぶの中、急な坂を登って行った先に小さな池があり、池の中央には、大きな不思議なガラスの物体が・・・「トムナフーリ」とは古代ケルトにおける靈魂転生の場のことだそうです。そこはまさに霊がいてもおかしくない、非日常の場だと感じました。お楽しみのランチは「島キッチン」へ。豊島の豊かな自然の中で作られた野菜と魚料理の数々は、作って下さった島の人々の暖かさを感じるものでした。満足満足・・・そして、11月半ばにオープンしたばかりの豊島美術館です。まあ！そこは今まで私の知っている美術館とは全く異なる、まるで宇宙基地のシェルターの様な柱1つないコンクリートの大きな空間です。一枚の絵も彫刻もありません。ふと、足元を見ると、あっ！ガラス・・・と思ったら、それはツツと流れていき別のそれと合体して他の形になっていきます。なんと、それは水。よく見ると、地面のあちこちから小さな泉のように湧き出て、流れ、様々な変化をとげ、じっと見ている見あきることがありません。上を見ると、大きな空洞が2つあり、そこからは真っ青な空が見え、周囲の風、音、光などを体感できる様になっています。面白い美術館でした。[植松紀子]

### 大島



「つながりの家」というテーマで展開された会場は二箇所。「ギャラリー15」は隔離政策で永年にわたり差別と不自由な闘病生活を強いられた入所者(島民)の生き様をアート作品に投影した展示でした。一方「カフェ・シヨル」は入所者が育てた野菜や果物を素材にケーキ&ランチを提供する憩いの場。いずれも悲劇の過去を見つめながらも現在、未来に希望を抱かせる内容で、入所者～アーティスト～見学者は心の輪でつながって行くのでした。[大澤宏敏]

### ご案内

私たちと鑑賞をご一緒しませんか？

美術館ボランティア「civi(シヴィ)」による  
ギャラリートークは特別展会期中の毎日曜日  
および祝日の午前11時～、午後2時～の  
1日2回、2階展示室にて行います。

発行:高松市美術館 編集:civi & 牧野裕二(高松市美術館)  
デザイン:藤本圭子(高松市美術館)

高松市 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4  
美術館 Tel: 087-823-1711 Fax: 087-851-7250

### 編集後記

■2001年、しびのーと4号の編集集中に9・11が起こりました。10年後、この編集集中に3・11が起きました。人災天災の違いはあっても失われる命の重さは同じです。それは何千分の一、何万分の一命ではなく、全て限りなく重い一人分の命です。心から哀悼の意を表します。何が起ころうと人間は何度でも手を取り合せて立ち上がる叡智の生き物だと信じています。[池田幸子]

■この原稿を手掛けている時、この度の震災がありました。芸術祭では私たちに穏やかな恩恵を与えてくれた海が、大震災では多大な被害をもたらした。改めて自然の強大さを思い知らされました。被災地の一刻も早い復興をお祈りいたします。[石床亜希]

■芸術祭が終わって、約半年、瀬戸内海もあの喧騒が夢だったかのように静かな海に戻りました。いまでも美しい海に変わりはなく・・・震災で変わってきた東北の景色を思いながら、感慨深く瀬戸の海をながめています。[石原ミエ子]

■瀬戸の島々を訪れる機会を与えてくれた瀬戸内国際芸術祭は、瀬戸内海的美しさを再認識する良いきっかけになりました。次回が待ち遠しいです。[植松紀子]

■昭和の名作だったコミック作品が最近、次々と実写化されている。デジタル進歩の映像世界も大いに結構！だからこそアナログの魅力、手作りのアート世界もこれまたイイのです。[大澤宏敏]

■自然あふれる塩江美術館、次回はアートと一緒に温泉も楽しみたいなぁ・・・ [木村真由美]

■最近、美術館にはまっています。「日曜美術館」「迷宮美術館」「ぶらぶら美術・博物館」…。残念ながらもすべてTVです。早く本物がほしい！ [國本康代]

■念願の植田正治写真美術館に行く予定が、ある事情で流れました。それじゃ、ということで向かった塩江美術館での、ガラタ？で作られた楽器によるライブは、ガラタといえども、立派な演奏でしたよ～！ [坂口弘子]

■大惨事を前にして芸術は無力かもしれませんが、人々が立ち上がり未来へと歩んでいく時、芸術は欠かせないものになるはず。これからの「復興期」において人々の心を潤すために、東北地方の芸術・文化施設が早期に再開されることを願うばかりです。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]